

○中国化学会平成15年度シンポジウム

『桃花源記』を読み直す

—いくつかのキーワードを軸に— 発表要旨

司会者 向嶋成美

陶淵明「桃花源記」は、膨大な量を誇る中国古典文学の中で、最もよく読まれている作品の一つであろう。しかし、よく読まれているということは、作品解釈をめぐる問題がすべて解決し尽くされていることを意味しない。むしろ、よく読まれてきているだけに、作品の読みがより深められ、さまざまな解釈が提示されているのが現状といえるべきである。たとえば、ここに描かれている桃源郷といかなる世界と見るかについても、当時の北中国に実在していた、五胡の戦乱を避けて山中に隠れ住む人たちの集落とする説もあれば、東晋末から宋初にかけて、民衆が生活苦のために五溪蛮と呼ばれる南方少数民族の地域に流入して行った事実を背景に見ようとする説もあれば、六朝時代の志怪小説によく見える異域探訪の説話との関りで見ようとする説もあれば、さらに道教の洞天福地の世界とする説などもあって、その議論は実に多彩なのである。

中国化学会のこのたびのシンポジウムでは、この「桃

花源記」を取り上げることになった。その取り上げ方については、安藤信廣氏を中心とする企画委員会で検討が重ねられた結果、「桃花源記」をいくつかのキーワードを軸にして読みかえし、この作品世界をまた豊かにとらえなおしてみるとの方針が決定した。キーワードを軸に作品を読みかえすことを通じて桃源郷の世界や物語の構造を明らかにし、文学作品としての読みをさらに深め、さらには高等学校校漢文教材としての可能性もあわせて考えてみようというわけである。

坂口三樹氏は、「秦時の乱」をキーワードとして取り上げ、桃源郷の成立起源を「秦時」と設定することによって、中央集権体制が確立する以前にあった素朴な農村共同体をこの物語空間として描き得たとする。門脇廣文氏は、従来から議論の多い「外人」をキーワードとして取り上げて論点を詳細に整理し、多様なレベルでの「文脈」のもとで整合的に検討することが問題解決に有効であるとする。また小出貫暎氏は、高等学校校漢文教科書の脚注に見える「秦時の乱」「何世」「問津」などについての説明の相違を指摘し、さらに「外人」や「桃花林」などについて所見を述べた。いずれも興味深い報告であった。

当日は、フロアからも活発な意見が数多く出た。それら

は、一定の方向に集約はできなかつたけれども、文学作品としての読みを深めるという点で、シンポジウム所期の目的は達せられたと思う。(筑波大学)

桃源郷成立の時代設定―「秦時の乱」をめぐる―

坂口 三樹

陶淵明の「桃花源記」(以下「記」と略称)では、桃源の住人たちの祖先は「秦時の乱を避け」て「絶境」に移り住んだとされている。桃源成立の起源を、このように「秦時」に設定するのはいかなる理由によるのか。一見、瑣末にも見えるこのような問題に拘泥するのは、洞窟の中の別天地を訪ねる所謂「洞天探訪説話」の中にあつて、洞天の起源に言及したものがあるを見ないからである。『搜神後記』巻一所収の一連の洞天説話群でも、当の「記」を除いては見られないし、『幽明録』所収の「劉晨・阮肇」の説話にも言及はない。このように、洞天の起源への言及が他の類話に見えないとするならば、それを設定するという趣向こそが、淵明の独創に係るものであつたとみなせよう。

この「秦時の乱」に関しては、従来の注釈は「宋(あるいは劉裕)を秦に喩えた」(洪邁・黄文煥)としてそこに寓意を見たり、「秦は苻堅の前秦をいう」(陳寅恪)とし

て桃源の所在を特定しようとするばかりで、その設定が「記」に描かれた桃源空間とどう連動しているのかといった、物語の構造と関連させた観点からの考察は、ほとんどなされてこなかつたように見える。いったい淵明は、いかなる意図あつて、桃源の成立起源を「秦時」と設定したものであろうか。

この問題を考えるには、唐・段成式『酉陽雜俎』所収の「葉限」(統集巻一)の話が参考になる。現存最古のシンデレラ譚として著名なこの話は、「南人相伝ふ、秦漢の前に洞主呉氏有り」との書き出しで始まる。この「秦漢の前」という時代を、ことさら事実とする必要はあるまい。それは、中央集権体制のもとに歴史に組み込まれる以前の、物語の自由を保証する時間として提示されたものと考えるのが至当であろう。

このように考えれば、「記」が桃源の起源を「秦時」と設定した意図も自ずから明らかとなろう。桃源の住人の祖先は、秦の始皇帝の暴政を避けてこの地に移り住んだのであつた。そこで営まれているのは、強大な中央集権国家体制に組み込まれる以前の、支配・被支配の関係のない淳樸な農村共同体の生活であつた。換言すれば、このような桃源の物語空間を可能ならしめるためには、その成立起源を

中国最初の中央集権国家である秦帝国の成立時と設定する必要があるのではないだろうか。(余談ながら、外界に戻った漁人が、中央集権国家体制の地方における象徴ともいべき「太守」のもとに届け出たというのは何やら示唆的でもある。)

(聖徳大学短期大学部)

陶淵明「桃花源記」「外人」の

解釈の概要と新たな検討方法

門脇廣文

「桃花源記」に三度あらわれる「外人」に対する解釈は「桃花源記」全体の理解に本質的な影響をおよぼすものである。従来は訳注や論考も、それぞれ、さまざまな観点から「外人」の問題を検討してきた。それをまとめると次のような五つの解釈に分けることができる。

甲——漁人と同じような服装であるとするもの

(一) 単に「桃花源の外の人」という説(一海知

義・星川清孝・高橋徹・興膳宏・和田武

司・田部井文雄+上田武)

(二) 「桃花源」の世界は「洞天」であることを

前提とした説(内山知也・村山敬三)

乙——漁人とは異なった服装であるとするもの

(一) 「外国人」と解釈するもの(狩野直喜・鈴木虎雄・釈清潭・斯波六郎・松枝茂夫+和田武司)

田武司)

(二) 「別世界の人」と解釈するもの

1 単に「別世界の人」と解釈するもの(南

史一・都留春雄+釜谷武志・石川忠久・

沼口勝・小出貫暎)

2 「桃花源記」の世界は「洞天」であるこ

とを前提として「別世界の人」と解釈す

るもの(坂口三樹)

ただ、これらについて検討した観点は必ずしも有機的なつながりをもっているわけでもなければ、一貫した論理のもとにあるわけでもなかった。そこで、発表者は従来の論考を整理し、それを発表者なりに組みたてなおした。その結果、「外人」という言葉の意味するところを検討するに、次のような六つのレベルの「文脈」のもとで再検討することが、一貫した論理のもとにあるゆえに有効であり、それに従って再検討を加えるべきだと考える。

(1) 一語、一文における検討

(2) 前後の文章との関係で構成される文脈における

検討

- (3) 文章全体で構成される文脈における検討
- (4) 「桃花源記」と「桃花源詩」との関係で構成される文脈における検討
- (5) 唐代の「桃源」詩との関係で構成される文脈における検討(時間軸における文脈)
- (6) 「洞窟探訪説話」との関係で構成される文脈における検討(空間軸における文脈)

(大東文化大学)

高校教材としての『桃花源記』

小出眞暎

高校での古典教材として多くの教科書に取り上げられている『桃花源記』について、シンポジウムという形で「読み直し」が提起されたことは大変意義深いことであった。

文学作品としてのみならず、理想の社会とどのようなものかを考えさせる格好の作品である『桃花源記』であるが、改めて各教科書を比較してみても、語句・語法のみで異なるの多くあることに驚かされた。その幾つかを掲げてみる。

① 「外人」(男女衣著、悉如外人)

A 漁人にとって「外人」(ア 外国人 イ 別世界の人)

B 桃花源の外の人(すなわち、漁人と同じ世界の人)

近年、この作品の問題点としてこの「外人」の解釈に集中している観がある。(私見はAーイ)

② 「秦時乱」 A 秦朝成立前の争乱 B 始皇帝の暴政による争乱 C 始皇帝死後の争乱(各地の反乱)

③ 「何世」(読み……「イズレノヨゾ」「ナンノヨゾ」「ナシゼイゾ」)

A どういう世の中か B なんとなくいう王朝か C (秦の) 何代目の皇帝か

④ 「随其往」の「往」の主語

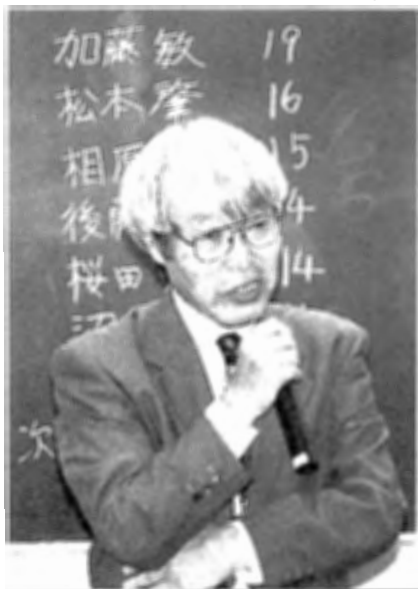
A 漁人 B 命を受けた役人

⑤ 「遣人……」の部分の返り点の施し方

このように、「外人」以外にも考察の必要がある部分があることが分かる。多くの問題点があるが、むしろこのことから生徒には読解のおもしろさを感じさせたい。

《全体の内容面から》

陶淵明の想い描いた理想郷はどのようなものか、改めて考えてみる必要がある。漁師は「忘路之遠近」の後「桃花源」に逢う。すでに漁師は未知の世界に入り込んだことになる。さらに林が尽きたところの山の「小口」を経て(鍾乳洞探訪などの体験を生かしているか)、整然とした、し



総会で挨拶する新会長

かも争乱のないのどかな農村に入り込む。二重構造のような描き方であるが、ともに淵明が「ありたし」と思った風景であろう。「帰去来辞」をはじめ田園を賛美して田園詩人といわれる陶淵明が描いた理想郷は、仙人が住むいわゆる仙境のようなどころでは決してなかったであろう。

また、この話を「晋太元中」と筆者自身の時代に設定し、「後遂無間津者」で終えているが、想像を逞しくして敢えて言えば、今いる田園をより良い田園にし、理想郷を自ら作らんとする陶淵明の姿が浮かぶのである。

(星陵高等学校)

2003 (平成15) 年度

中国文化学会大会



シンポジウム風景